

過江夜行武昌山聞黃州鼓角

元豐七年四十九歲（一〇八四年四月） 弟の轍のいる筠州へ向かう途次の作

江を過り^よ 夜 武昌の山を行き 黃州の鼓角を聞く

清風弄水月銜山 清風 水を弄し 月 山に銜^{ふく}まる

幽人夜度吳王峴 幽人 夜度^{わた}る 吳王峴^{ごおうけん}

黃州鼓角亦多情 黃州の鼓角^{こかく} 亦多情

送我南來不辭遠 我を送り^{なんらい}て南來し遠きを辭せず

江南又聞出塞曲 江南 又た聞く 出塞の曲

半雜江聲作悲健 半ばは江聲^{まじ}に雜^{ひけん}りて悲健を作す

誰言萬方聲一概 誰か言^{ばんほう}ふ 萬方^{こえいちがい} 聲一概と

鼉憤龍愁爲餘變 鼉^だは憤^ぶほり竜は愁へて余が爲に變ず

我記江邊枯柳樹 我は記す 江辺なる 枯れたる柳樹を

未死相逢眞識面 未だ死せず 相逢^{しん}うて 眞^{めん}に面を識る

他年一葉沂江來 他年 一葉 江を沂^{さかのぼ}って來^{きた}らば

還吹此曲相迎餞 還^また 此の曲を吹いて 相迎^{げいせん}餞せよ

【語釈】○過江：揚子江の北岸、黄州の側から南へ江を渡る。○武昌：今の湖北省鄂城県、黄州の対岸。○鼓角：太鼓と角笛。○月銜山：山が月をふくむ（くわえている）。○幽人：世捨て人。とらわれ人。東坡みずからをいう。○吳王峴：武昌の山の名。三国の呉の孫権が樊口から武昌へ山道を切り開いたので吳造峴とよんだ。東坡志林にそれを吳王峴と記している。○黄州鼓角亦多情：黄州を去る東坡を送る人々はみな慈湖まで、そして陳慥ひとりには九江まで来たという。その人々の情を「多情」とし、同行の人の誰か、恐らくは護送の兵士が吹く鼓角について「亦（もまた）」といった。○出寒曲：楽府の横吹曲。○悲健：健は力の充実したさま。○誰言：杜甫の詩の「鼓角縁辺の郡、川原夜ならんと欲する時、万方声一概、吾が道竟に何にか之く」（秦州雖詩の第四首）を指している。杜甫の詩の意味は、戦乱のため、国内どこへ行っても鼓角の音が聞こえるということ。○鼙：わにの一種。○迎餞：餞ははなむけする。迎えた、送ったりする。

【通釈】すがすがしい風は川面の水にたわむれ、月は山にくわえられたように山の端に沈んでゆく。この武昌の山道の夜景を満喫しつつ、わたくしはいま吳王峴を越える旅を続けている。黄州の鼓角もまことに情が深く、遠い道のりを厭わず、大江の南までわたくしを送って来てくれる。江南でまたしても聞いた出塞の曲、その音は江の音と半々に雑じりあって、ことさらに、悲しくもまた雄々しくひびきわたる。「国じゅうどこへ行っても鼓角の音が、千編一律に響いている」と、嘆いたのは誰だったか。龍鼉もいきどおり愁えて、今はわたくしのためにその曲調を変容してくれたらしい。黄州の江辺に枯れてたつひともの柳樹は、いつまでもわたくしの記憶にとどまるであろう。黄州へ来たわたくしが初めて出逢った時、まだ枯れてなく、まさしく心をかわした友であったのだから。いつの年か一葉の扁舟にさおさして江を遡って来ることがあるならば（その時こそあの柳樹のもとで）、またこの曲を吹いてわたくしを迎えもし送りもしてもらおう。